

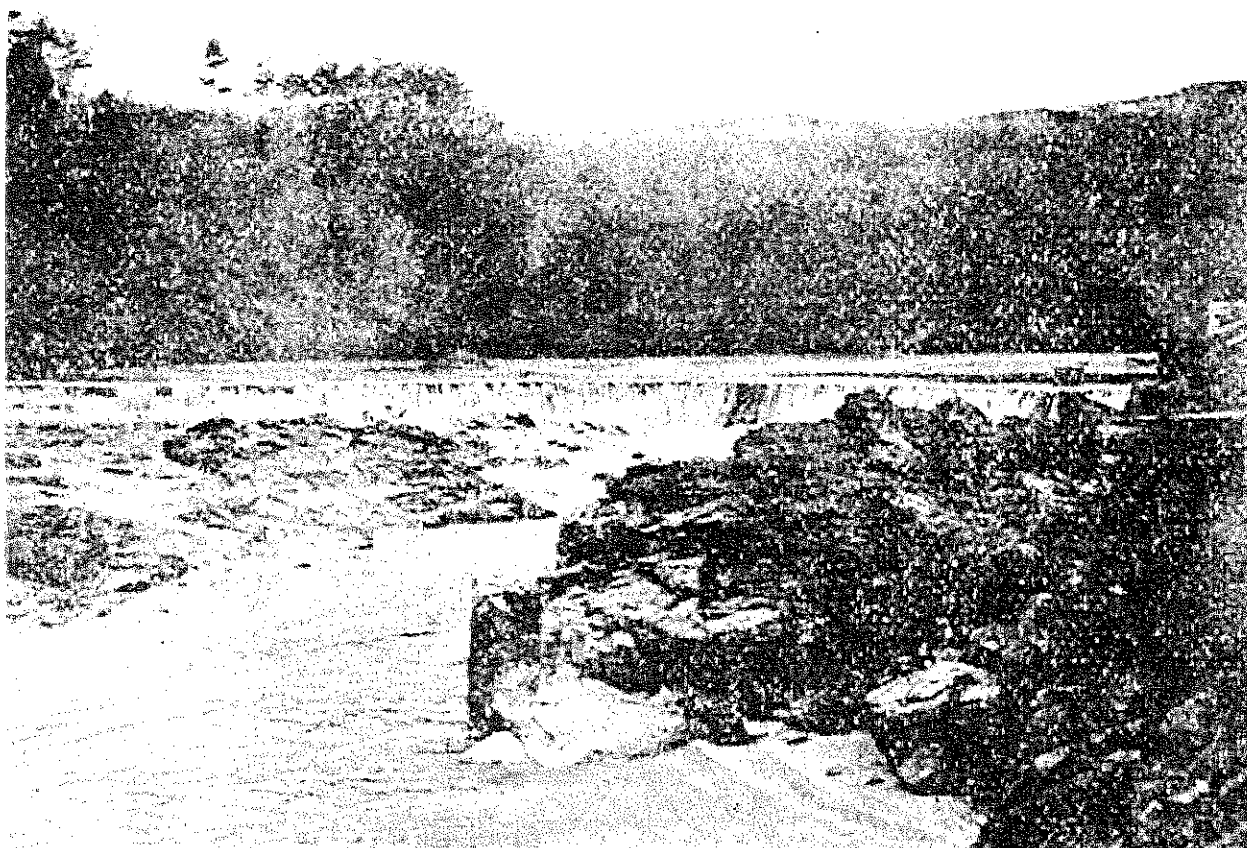
広島郷土史研究会

会報

第114号

事務局 呉市広公民館内
〒737-0706 広島新開2丁目1-4
電話(0823)71-0706 FAX 73-5304
発行 平成25年5月16日
広島郷土史研究会編集委員会

広島水力電気株式会社広水力発電所の郷原村水源地



明治28年8月9日藤田讓夫広村長が中心となって広島水力電気株式会社発起人決議書を作成。その後、同社の自論見書もくろみを作成して工事にとりかかり明治33年(1900)に開業にこぎつけた。広水力発電所の建設当初、広村二級大瀧川上の郷原村に建設した水源地えんていの堰堤。現在はダム湖の下に沈んで見ることは出来なくなったが、当時は西日本初の水力発電所で、最も大がかりな設備であったが、堰堤の高さはわずか7尺(約2.1m)であった。写真の岩場の下流が仏生の瀧(郷原村の呼称)で広村では二級大瀧と唱えていた。

(写真 賀茂郡志・大正5年刊より転載 文 上河内良平)

目次

模範村広村のその後	小栗 康治・・・・・・・・・・2頁
第二音戸大橋開通 平成25年(2013)3月27日	小早川 諭・・・・・・・・・・8頁
平成25年度 広島郷土史研究会総会資料	吉田 顕治・・・・・・・・・・9頁
事務局報告	上河内良平・・・・・・・・・・22頁

あったことは、出発に際して公にした一文にも明らかであるが、余が広村に来るまでには、かねてから聞きおぼえていた藤田村長、岩西助役、大洲順道師へは是非対談してみたいと意気込んでいたのであるが、これらの期待が全部裏切られたことは、余としては甚だ痛惜の至りであった、けれども幸いにも村越前校長の宅を訪問して氏よりことを得たることという物語りを聞くは何よりの力となった。氏の物語りは主として前記三氏の^{げつたん}月旦

(人物評)であったが、氏は過去における同志を追懐するのあまり、^{らくるいぼうだ}落涙滂沱たるものがあつた。

今氏の物語りの2、3を摘記(要約)すれば、藤田前村長はきわめて温厚なる人格者にして彼の前にはいかなる難問題があろうと、あたかも陽光の前の氷のごとく、易々として解決されていたことや、彼の死後は同僚岩西助役が、その緻密なる頭脳を以て、氏の困窮せる家政の整理を引き受け、家族をして^{こうかん}後患なからしめたる美談や、あるいは生き仏として尊崇されていた大洲順道師の葬儀の際には、誰いうとなく、どこから集まったのか無数の会葬者を以て満たされて地方ではかつて見ざるの盛葬が営まれたことや、岩西助役が非常に信仰心の深かったことや、かつて内務省から藍綬褒章が下賜せられんとするや、岩西助役辞退して藤田氏を推し、藤田氏また辞退して岩西氏を推し、ついにはとうとう双方同時に下付の榮にあずかったことは互譲の美德として教訓ある逸話となって残っていると云う。

村越氏は吐き出すようにして月旦に余念がなかったが、氏の衷心あるところと対照して、余の胸中にも悲劇の幕が展開せずにはいられなかった。中心人物をなくした広村は今や現代資本主義の悪魔が^ち馳駆(奔走)しているありさまである。

文明の弊とはかくのごときものか。と記しています。

なぜ模範村は変貌したか

最大の要因は広に工廠が設置されることになり、土地投機熱が高まり資本主義の害毒に村民が染まりはじめたことと、外部からの移住者が増えて模範村の精神的支柱である「一村一家主義」が崩壊しはじめたことにありました。

広村民は篤い信仰心を持ち、村民あげて浄土真宗の信者で、村の集まりでも岩西助役が宗教の法話などを引き合いに出しながら道徳心を植えつけていたし、各部落で行われる寺の法話でも村政に協力するように話していました。この活動が「一村一家主義」を醸成していたのですが、村外からの移住者が増えて宗教法話と村政の結びつきが次第に弱くなって統制が利かなくなっていたのです。

たとえば藤田村長自身、家政が傾くほどの散財を行うようになっていたように、広島水力発電所設置前後から少しずつ資本主義の悪癖に染まり道徳心がゆるんでいきつつあったことに端的に現れています。

その後については前記『模範村行脚』が記すとおりです。しかしそれでも全国一模範村を形成した輝かしい歴史は消えることがありませんでした。このため、昭和の時代になっても模範村広村は多くの人によって語り継がれ、なにかにつけて羨望の眼差しで見られることが多かったのです。

ひろかんらん(キャベツ)の歴史の実態

広キャベツの歴史については『大呉市民史大正篇下』610頁に以下の記載があり、その歴史を語っています。

広特産の夏甘藍 駐在藤井技手「年産21万円中6万円を占む、品質優良、全国の首位、起源は明治37、8年戦役当時より呉市場に球菜移入多きを加えるをみて同村試作、しばら

くは失敗を重ねしが43年皇后陛下行啓の際は買い上げ、44年本願寺光瑞師に献納、当初移入された種子、サクセッション、米国、北海道、中野種はいずれも結球せず、地質に適する独特の栽培法を案出し中野種を改良せるが今日のもので、自然特有の品種となり、ほとんど原形を変じて扁平中形となり、一個500匁より1貫300匁に及び長期貯蔵にも堪える、非常に結球しやすいが一大特長、販路は大阪、神戸、四国、朝鮮、満州へも、益々発展の機運にあり」と記しています。

『呉市史第6巻』999頁、広村の「主要蔬菜の生産額」表によるとこの記事が裏付けられません。この表は明治20年～44年、大正2年～13年、それに昭和時代の広村役場「産業統計報告書」にもとづいて作成されたもので、広甘藍の各年度別生産額は明治43年は40円、大正元年160円、同3年840円、同5年1,750円、同7年3,720円、同9年4,080円、同11年3,630円、同13年5,500円、昭和元年18,440円、同3年32,235円、同5年8,462円、同7年17,581円、同9年31,161円、同11年43,560円、同昭和13年75,070円となり、この年蔬菜中で一番の生産額になり最盛期をむかえています。

明治43年以前の広村の主要蔬菜はサツマイモ、サトイモ、ジャガイモ、ダイコン、ナス、スイカ、ネギ等でキャベツは含まれていません。このように統計の村広村といわれていたその統計が事実を雄弁に語っています。

つまり、これまで述べられていた、明治17年の水害による村の困難をキャベツを生産することで克服したとか、模範村形成にキャベツの生産が貢献したとかの説はなりたないということになります。

第一、そもそものはじまりが明治37～38年の日露戦役当時より、呉市場に球菜移入多きを加えるのをみて、同村試作。しばらくは失敗を重ねたが、明治43年皇后陛下行啓の祭お買いあげ。44年本願寺光瑞師に献納。との

記事がその事情を雄弁に語っています。

すなわち、インターネットが記す広甘藍と模範村広村の関係は結びつかないのです。

藤田譲夫の読み方

藤田譲夫村長の名に「よしを」と「じょうふ」のふたとおりの読み方あり、どちらが正しい読み方かが問われていますが、すでに没後95年になり直接氏を知る人は地元でも居ないのでよくわからないのが実情です。

これまでは、「じょうふ」では「情夫」を連想するので「よしお」ではなかったのではなからうか、ということになっています。

しかし明治44年3月発行の『読売新聞社出版部篇模範町村之現況』東京読売新聞社発行(七)当局者の精励、の項では「そんちようふじたじょうふし」とふりがなをつけています。もちろん「じよやくいわにしけんぞうし」「がくこうちようむらこしりゅうかんし」も同様に、記事中のほとんどの漢字にもふりがながつけられています。

『広村の自治と宗教』(大正元年8月発行興教書院発行平原唯順篇)も同様です。この書には本派本願寺連枝大谷尊由師題辭、内務次官床次竹二郎氏序文、本派本願寺勸学赤松連城師跋文になる著で、記事中の漢字すべてにふりがながつけられています。その8頁に「げんそんちようふじたじょうふし」「げんじよやくいわにしけんぞうし」とあり、再販本も変化はありません。

新聞記者は当然名前や肩書きには細心の注意をはらって記事にするのが常で、本人に確認します。したがってまちがって訓読みにしたのだらうとして片づけられない性質のものです。

『自治と宗教』も同じことがいえる。藤田村長はまだ現職でこの著に目を通してはらずで、ふりがなが間違っていれば訂正したと考えられます。

大正13年11月発行の『模範村行脚』も前2